

2011年12月 シャミナード年

## ギョーム・ヨゼフ・シャミナード師のように マリアと共に 私たちは新世界に向けての預言者となる

福者シャミナード師は、聖パウロの書簡を熱心に熟読する人で、『ヘブライ人への手紙』の内容に精通していました。“預言者”という言葉の意味をより良く理解するため、私たちがこのヘブライ人への手紙に頼ることに、師は賛成したに違いありません。“預言者”という言葉は、今月のテーマ“シャミナードのように、マリアと共に、新世界に向けて**預言者**となる”の中心で、かがり火のように輝いています。

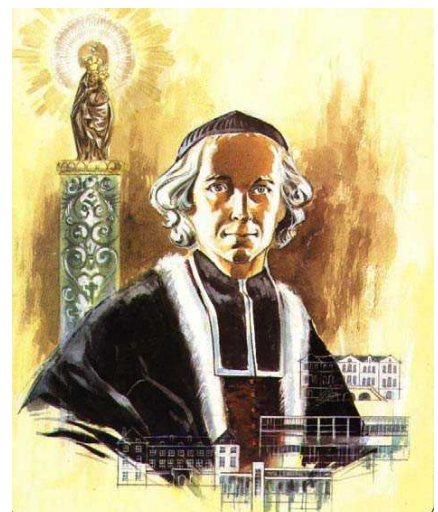
### 信仰から預言者的な“ビジョン”へ

この手紙の著者はこう書いています：“信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです”（ヘブライ11・1）。シャミナード師にとって信仰がどんなに大切であったか、を私たちは知っています。“真の信仰を持つ人にはすべてが可能です”（『信仰に関する記録』n. 43）。あるいはまた、“信仰の精神は・・・聖霊以外の何ものでもありません”（『信仰に関する記録』n. 263）。“望んでいる事柄”（ヘブライ11・1）は、一見ただけでは“見えない事実”であり、それらは、最終的に人が神の恵みである信仰と希望の目をもって世を見るまでは、了解されないのです。（信仰と希望の目で見ると）時だけ、人は本当にものを見、信仰者はシャミナード師がビジョンを描写するようなあり方でビジョンに生きる人となります。つまり、“信仰を生きるということは、私たちに示される自然的、超自然的すべての事柄を、**神が、それらの事柄についてもってられる認識によって眺める**ことです”（『信仰に関する記録』n. 533）。何故なら、『奉獻生活』(Vita consecrata) のn. 84に書いてあるように“真の預言は神から生まれる”からです。シャミナード師は、“残された人生において、信仰という素晴らしい道をたどることが出来れば、なんと幸せでしょう！”と付け加えました（『信仰に関する記録』n. 164）。これは何となく預言者たちのようです。

### 預言者的な行動

預言者というのは、神が彼らに呼び掛け続ける新しい驚くべき招きや刺激に対して、目を見開き、耳を澄ませ、注意を払っている人たちです。シャミナード師は繰り返し言いました：“主は新しい戦いを選ばれました (*Nova bella elegit Dominus*)。 ” 主は、戦いをする時に、絶えず新しい方法を選ぶということです。

預言者というのは、今までのやり方、型にはまったやり方、臆病によってがんじがらめにされる（身動きできなくされる）ことを拒否する人たちです。預言者たちは、出エジプトの出来事の中に生き、常に予期しない道にその民を先導する“移動する神”、



その神のイメージ（象り）で生きる人たちです。シャミナード師に関して言えば、彼は大胆に同時代の社会の中に入り、注目すべきやり方で、自分の霊的家族の全基礎を一般の信徒におき、フランス革命の良い面を利用して、後に“カトリック・アクション”と言われるようになる使徒活動の方法を取り入れました。その家族の修道者のメンバーは、司祭であっても、修道士であっても、平等を享受し、“ムッシュ”と呼ばれ、特有な服装をしないことになるのです。

預言者というのは、自分の師及び主に従いたいなら、（たとえそれがディアスポラの中に一つの共同体を形成することになるとしても）、社会の“広場”に出て人に知られること、自分たちを囲む（守る）堀から出てあるがままの社会に入ること、ありのままの人間の生活が展開されているその社会の中で自分の信仰を証すること、を躊躇しない人たちです。聖霊は、思いのままに吹きます。そのため、自分たちとは違う文化圏や考え方のなかで聖霊が働きます。第二バチカン公会議の司教たちと同様、預言者たちは“真に人間的な事からでキリストの弟子たちの心に反響を呼び起こさないものは一つもない”（『現代世界憲章』1.1）こと、及び、“この世界が創造主の愛によって造られ保たれて”いること（『現代世界憲章』2.2）を知っています。シャミナード師の考えは、“私たちの宣教使命は、至るところに信仰の精神、信仰の教えの精神を浸透させ、信者を増加すること”でした。（『信仰に関する記録』n. 182）。

預言者とは、試してみる勇気を持ち、その場その場に適応して生きることができる人たちです。彼らは、新しい目的地に向かって常に前進する民となるために、信仰における私たちの祖先たちのように、幕屋での生活の仕方を学び直す必要があることは確かです。同時代の人々のただ中であって、もし預言者が権威に訴えるだけでなく、人々と共にしている生活にも訴えるならば、このことが持つ現実的、理論的な意味合いを含めて、多分、人々は預言者の証しを理解するでしょう。シャミナード師は、その全生涯を通して、幕屋から幕屋へと移りました：即ち、ミュンヘンから、ボルドーへ、そして、革命中はボルドー市の危うい隠れ場へ、サラゴサへ、再びボルドーへ（但し今回は、小教区という安定した働き場ではなく、仮の幕屋、つまり、一つの祈祷所から別の祈祷所へ、一つの新事業から別な新事業へ）といった具合です。師は、亡命者と共に亡命者となり、若者と共に若者となり、貧しい人と共に貧しくなりました。“私たちは「なんでも、あのひとのいうとおりにしなさい」（ヨハネ2・5）と言われたマリアの宣教師である”（『信仰に関する記録』n. 295）、と師は言われなかったでしょうか。マリアの宣教師であるということは、素晴らしい応対ができる自由な心、真の意味で“自由に移動できる”心を前提とします。

## 最初のモダン女性であるマリアと共にいる預言者



“全てのことはマリアを通してなされ、すべての賜物はマリアの御手を通して私たちにもたらされる”とシャミナード師は教えています（『信仰に関する記録』n. 464）。そのためにシャミナード師は、マリアと“真の契約”を結ぶことを提案しました。（実際に、師の最初の弟子は、無原罪の聖母の祝日の12月8日にその契約をしました）。行動家であるマリアとの契約を結ぶという理由は？“なぜなら、かつてと同じく今日でも、マリアは卓越した婦人、蛇の頭を打ち砕くために約束されたあの婦人であることに変わりはないからです。そしてイエス・キリストは、マリアをいつもこの偉大な名でお呼びしながら、マリアが教会にとっては希望、喜び、命であることを私たち

に教えておられます”（『シャミナード師の手紙』第5巻、n. 1163）。要するに、シャミナード師が私たちに提案しているのは、最初の“モダン”な女性、現代的な女性であるマリアと共に預言者となるということです。

天使に質問し、返答を求めたお告げ以降、マリアは、イスラエルの民の召命に完全に忠実でありながらも、同時に、全く自立して、自分の運命をどのように自由に選ぶかを知っていました。ユダの“アイン・カリム”という町に従姉妹のエリサベトを訪問し、勇気をもってマニフィカトを唱えたとき、すぐにマリアの大胆さが示されました。マリアは、ベツレヘムへの旅の時から十字架のそばに立つまで、絶えずその勇気を表わしました。二回にわたって、マリアは“これらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた”と言われていました。思い巡らすことができる方であったからこそ、どんなことが起こっても、その出来事に直面して責任ある女性としてどう行動すれば良いのかが分かっていたのです。

マリアは、イニシアチブを取ることができる人として、全生涯を通じて行動しました：カナの婚礼の“ぶどう酒がなくなりました”という場面を思い出してみてください。他者に対して気配りのある、開かれた方でした。エリサベト訪問の折に、カナ場面で、また、教会が始まったばかりの時代に入ってもそうでした。旅に出るのが一番速かったマリアは、その人生の初めから終わりまで、文字通り“行動する”女性であり、また、彼女はダイナミックな女性で、真の“シオンの娘”として、イスラエルの民の使命を引き受けることのできる方でした・・・（自由で、忠実で、自立性のある、大胆で、勇気ある、思い巡らす、責任ある、他者に対して気配りがあり、開かれている、イニシアチブを取ることができる・・・）、これら上記の言葉は、マリアが“モダン”であることを十分に証明するものです。マリアは端的に言って、ダイナミックな方でした。

ダイナミズムは、愛において、御父のみ旨に完全に合致したものでした。これによって、彼女の従順、彼女の謙遜と言われているものは、彼女の他の全ての資質を計るもの、その最高の保証とされるのです。シャミナード師によれば、マリアは、あの“婦人”であり、私たちは、“新しい世界”を生まれさせようとして“全身全霊で彼女を助ける彼女の特別な助手、道具”なのです。



### 新しい世界に向けての預言者

預言者は、派遣されるために召されている者です：派遣されることのない召命はありません。預言者は、家を離れ、自分の安全地帯、その安定した暮らしぶりを放棄するよう召されている者です。預言者は、その時代世界に完全に融け込み、人々の間に自分の幕屋を張り、実地訓練をおこない、定住しない生活をするような危険を冒すために召されている者です。

預言者は、古い世界の中心に新しい世界を確立するための任務を（神から）与えられている者です：これは使徒が言うように“来るべき喜び”の世界です。この喜びはキリストであり、この待降節の期間中、このキリストの来臨を迎える準備をします。シャミナード師は言いました：“この世にいる私たちの兄弟姉妹を救うための任務を、おとめマリアが私たち一人ひとりに託しています。”

私たちは教皇ヨハネ・パウロ二世が言及した“愛の文明”の到来（ADVENT）を体験していることを忘れないようにしましょう。教皇は、自分の関心事の第一位に、一番貧しい者たちと一番若い者たちの世話、および、正義と平和のための働きを挙げたということです。

シャミナード師は、自分の弟子が“特に若い人及び貧しい人に”奉仕する用意ができていることをはっきりと宣言しました。“（信仰とキリスト教的生活習慣の）教育の誓願”を宣立した師の修道者たちは、マリア会員のベルナール・ヴィアル師が書いたように、“本物の教育は愛であり、単なる専門職、技能のことではない”ということを確認していました。当時のCongregacionの信徒会員たちも、行動なしには、正義は実現できないものであるということを理解していました：それで彼らは煙突掃除の子供たちのために活動しました。また、彼らは、ラムルス嬢と共に、回心した売春婦たちのために働きました……。正義なしには平和はありません。シャミナード師が熟読し、繰り返し黙想した聖アウグスティヌスは既に述べていました。“正義を欠いては、政治（帝国）は強盗と異なるところがありません。”従って、平和のための戦いは、正義のための戦いと同時進行するものです。

このとき初めて、貧しい者の心は神の子の愛のメッセージ、クリスマスの夜の持つあの完全な新しさに開かれることとなります。この新しさだけが地の表を新たにできるのです。

## 今月の祝日

8日 無原罪の聖マリアの祭日 MLC と FMI の保護の祝日  
無原罪の聖母青年会（Congregacion）の最初の集まり（1800年）

ロジェ・ビシエルベルジェ, MLC